

## シリーズ 私の一冊の本

経営情報学部 森勇治 先生

ジェームズ・P・ウォマック〔ほか〕著 沢田博訳

『リーン生産方式が、世界の自動車産業をこう変える。』

―最強の日本車メーカーを欧米が追い越す日―』

閲覧室 2階 537.09/W85 経済界 出版

今回、私をご紹介しますのは『リーン生産方式が、世界の自動車産業をこう変える。』というタイトルの本です。「リーン」というのは無駄のないという意味で、最近では起業の領域でも使われています。

本書の原著は米国マサチューセッツ工科大学と英国サセックス大学の研究者が一般向けに書いた書籍です。この研究が行われた一九八〇年代後半、日本がバブル経済に沸き立つ一方で、米国は長い経済停滞を続け、特に両国の産業の中心である自動車産業の盛衰に注目が集まっていました。

この格差を説明するために、本書で提唱されたのが「リーン生産システム」です。これはいわゆるトヨタ生産システムで、米国における主流であった大量生産システムとは対照的な概念です。大量生産システムは工場内の効率向上に焦点を当てたシステムで、リーン生産システムとは工場外、つまり部品を生産する系列会社、販売会社のありかたについても配慮したシステムです。大量生産システムは部分最適化を、リーン生産システムは全体最適化を目指していると言ってもよいでしょう。

私たちが本書から学べることは、「概念化」だと私は思います。日本人の研究者の言説は概念化が弱いと常々言われているのですが、本書はそれを具体的に学べると私は思います。周知の事柄を、どのように概念化することができるのでしょうか。

この書物が私にとって意義深いものである理由は、私の大学院修士課程の教材として、精読した上での議論の重要性を、この本を通じて叩き込まれたからです。本の内容だけでなく、どのように読んだのかという点も個人に及ぼす影響は強いようです。